

日中関係学会 新春講演会 2022年1月24日(オンライン)

宮本雄二会長 「米中関係と日本～北京冬季オリンピック・パラリンピックを控えた中国の内外情勢を踏まえ、日本はどう生き抜くか」(講演本文)

明けましておめでとうございます。

コロナが蔓延しており、新年を祝う雰囲気にはなれませんが、皆様の生活を含め大変なことと思います。ここは頑張るしかありません。今年もよろしくお祈りします。

レジュメを用意しました。現時点の私の頭の整理ですので、ご参考にしながらお聴きください（注：本文末尾に掲載）。

1. 議論の与件

世界がどういう枠組みになっているかを踏まえておかないと、どういう日中関係が一番適当なのか判断する事が出来ません。

まず、今の国際社会は核兵器の脅威や地球環境の問題など、地球規模の問題を抱えており、各国がオレだ、オマエだと言っておれる状況ではないと言えます。幸いにも核戦争を経験することはなく米ソ冷戦時代は終わりましたが、これからも我々は常に理性的な国家指導者が引き続き出るという保証はありません。一年前に、米国議会への突入事件がありました。あの時、米軍の最高司令官は中国と緊急に連絡を取り「中国に対する攻撃の意図はない」と伝え、事態をコントロールしようとしたが、常々、どうしたら平和と安全を守るかという体制を考えておかなければならない訳です。理性を失った指導者を持つかもしれないという危機に備えなければならないという事です。

つまり、人類が切迫した状況を抱えた時、どういうメカニズムを作るか、考えておかなければならないという事です。気候変動がおかしくなり、地球規模の危機を迎えた時に、アメリカだ、中国だと言っておれない訳で、従って、あらゆる問題を考える時、現在の国際社会での主流は「協力」であるべきで、これがすべての国にとって正しい外交となるものと確信します。

二番目に、経済のグローバル化は進んでいかざるを得ない、経済の合理性がそう要求するからです。一方、経済のロジックは差別をもたらしましたが、国民社会は民主主義で統一されていますので、その民主主義のロジックは違う答えを引き出すかもしれない、即ち、新自由主義は差別と格差を拡大したが、それを民主主義で修正することを政治が求めてくる訳ですが、しかし大きな流れとしてはグローバリズムが引き続くという事です。これを想定するかしないかで、米中のデカップリングや我々の成長戦略が大きく変わってくると思えます。従って、基本的にグローバリゼーションが続くという想定は正しいと考えます。

三番目に米国のリーダーシップは落ちており、世界は多極化世界に向かっていると言うことです。一つの国がすべてを牛耳るのではなく、色々な極が出来て、多くの国が関わってくるとどういう形で国際社会のリーダーシップを確保するのが難しくなってくるわけ

です。昔英国に居た時、ヨーロッパの人たちと議論する機会があり、集団的リーダーシップ (Collective Leadership) について議論したことがあります。その時、同席のフランス人の口から「リーダーシップは本来 Individual であり、Collective ではあり得ない。問題の設定が間違っている」と言う発言がありました。それほどに複数の国のリーダーシップを見出すのは難しいということですが、多極化の中でも極同士で話をして、国際社会の方向性を決めていく必要があります。日本はこうした各極毎の話し合いの中に入り、リーダーシップの核となる動きをするべきだと思います。集団的リーダーシップのイニシャティブを確保する日本外交にとってのチャンスだと思われます。

四つ目に、国際社会が大きく変化した原因は中国ですが、中国の影響力の増大は事実であり、あまた、こうだという時代ではないのです。中国の影響力の増大を無視、見たくないという希望的観測で将来設定をするのは間違っていると思います。他方米国は、総合国力において中国を上回っており、中国が追い抜くのは難しいと思われます。中国の影響力が大きくなったことと、中国の思い通りになる事は別問題です。従って中国はソフトパワーを具現化した国際社会の在り方を打ち出さなければなりません。今の中国が出来るとは思えません。中国が国際秩序の修正や追加してくることはあっても、大きな国際秩序そのものは現在のままで動いていくと思います。こうした枠の中で米中関係があり、日中関係がある訳です。

2. 米中関係

(中国は内政の年)

今年、中国は党大会があるので、100%内政の年です。党大会にプラスになる事とはやが、マイナスになることはやらないという事です。一にかかって、人心、民心 (民の心、人の心) です。権力を掌握しているにも関わらず、習近平さんは歴代の指導者のなかでも最も敏感に民の動向を気にしている指導者です。江沢民、胡錦濤の時代までは権力を掌握していないにも関わらず、不満があっても経済の発展の中で吸収されて、社会・ガバナンスに余裕がありました。一方、温家宝さんは民の心をつかむために一生懸命やりましたね。民の心をつかむことが温家宝さんの権力基盤だったのです。揺さぶりは常にありましたが「民が私を支援している」と言い、簡単には国務院総理を変えられない状況でした。しかし、胡錦濤さんを含め政権全体は民の動向には無関心であったと思えます。

この点、習近平政権は党内の人心動向を含めて真剣に向かい合っていると言えます。しかし、党内的には安定度が高まっているように見えるが、実際にはもろいかもしれないのです。例えば、現在までは「ゼロコロナ対策が正しい」という事になっていますが、そうではないという事となった時、習近平政権にとっても打撃になる訳です。民心、人心の動向が党内の動向になれば、党内に「派閥」はないですが、個別には「習近平さんはおかしい」という意見も出てきて、今の政権を揺るがすきっかけともなり得るわけですが。また、今回のコロナ対策の中で、西安の病院で赤ちゃんが入院できなくて亡くなる事件が起こり

ましたが、國務院副総理が出て来てすぐに謝罪し、関係者を処罰しています。国民の納得することをやっている間は習政権は安定します。しかし、政治的でない日常的な事柄までも国民に制約を課するようになるとまた変わってくると思います。

米中関係においては、中国が自ら進んでアメリカとの関係を悪化させることはないと思います。逆にアメリカから攻められた時に何もしないと国民に批判されることになります。

(米国も内政の年)

米国も同じような状況で多くを語りませんが、対中強硬姿勢の転換は難しいという事です。注目すべきはバイデン政権は昨年 9 月の米中対話以降、中国との対話を重視してきています。中国の学者が書いたものに拠ると、第 2 段階は昨年 3~9 月でボトムラインを探っていた段階、第 3 段階 10 月以降はどのようにしてプロセスを管理するか、として中国を不必要に刺激することは止める事としています。

すなわち、米国外交は結構理性的なものです。議会で色々言われていますので、それが米国の方向と思われているかもしれませんが、中国との関係は対話路線に入っているのです。ただ、議会で色々な法律が作られてしまい、様々な対応をしなければならないので、具体的な行政部門からの施策は中国に対して厳しいものになるという状況が続いています。中国はそれ以上は攻められない、しかし、アメリカは攻める、という中で、バイデン政権としては最低限中国との対話の維持と不必要な衝突の回避を明確に意識してやっています。

(米中関係の本質)

次に、イデオロギーというものは米国が都合で言っているだけであって、以前にも申し上げたように、本質的にはクラスの中の 1 番と 2 番の争いにしか過ぎません。しかし、未来永劫に殴り合うという構図では無い訳です。今や「デカップリング」は出来ない訳です。やると米国の経済に響いてくるわけですが、米中が角を突き合わせているといずれ角が取れてくるものです。そこで、米国の主導的な地位を保ち、それを担保に中国の国力相応の国際的地位が認められる新たな米中関係になると思います。これは 3 年かかるか、5 年かかるかわかりませんが、中国の論文で精華大学の鞍剛氏が「競争と協力」或いは「責任ある共存」の時代が来るだろうと述べています。

(新たな米中関係に至るまでのプロセス管理、危機管理)

米中の対話は日本よりしっかりしています。昨年 9/9 の米中首脳電話会談以降、軍関係の直接対話も始まっており、プロセス管理が大事とされています。米中の直接対話の場はありますが、しかし、プラスの要因が減り、マイナスの要因も増えていることも事実で、危機管理が著しく重要となっています。上手くいくという保証はないのです。

ここで、日本はしゃしゃり出るべきであると思います。台湾問題では「軍事的抑止力」だけで中国を止めることはできないと思います。対話を強化し、お互いを理解し、安心感・信頼感を高め、ミステークやミスジャッジにより現地で衝突が起こらないような態勢が必要で、日本は「おせっかい」を焼く必要があると思います。そのためには日本は米国との信頼関係と自分自身の明確なロジックを持つべきだと思います。そして、米中双方に「こう

すればあなたたちのためになる」という事を言わなければならないでしょう。

アメリカの究極の目的は「中国共産党の統治の崩壊」にあると信じ込んでいる人がいるかもしれませんが、アメリカは中国共産党統治を打倒するつもりはないのです。一方、習近平の考えがアメリカのコントロールという現在の国際秩序に対するイデオロギー的挑戦と考えるとすればそれも違います。米国も日本も、国内統治の論理と国際連合に代表される国際統治の論理は一致しているのですが、中国の場合、「中国の特色ある社会主義」といっていますが、これは国際統治の論理とはなり得ず、これによってグローバルガバナンスが出来るものではないと思えます。従って「中国の挑戦」は米国の思っているほど大変なものではないということを我々は米国にもっと言うべきだと思います。日本外交はこうした状況に介入することが出来ます。

3. 日本のあるべき対中政策

(競争と協調)

我々は、米中どちらかを選ぶという事は実際上あり得ない訳で、米中どちらとも仲良くするしかない訳です。競争と協調です。二つの異なるものを同時に抱え込んだ日中関係とならざるを無いのです。

国会で、「人権外交」で岸田総理は高市政調会長から攻められています、何のために「人権外交」をやるのでしょうか、よく考えて欲しい。欧米からの受けはよくなるかもしれないが、中国からのマイナスはそれを大幅に上回ります。そもそも論で言わせて貰うと、日本国憲法に人権の重視が謳われ、外交でも重視すべきだが、「人権外交」という形で行った場合どれだけのメリット・デメリットがあるのか、日本国憲法の掲げる人権外交に対して、必ずダブル・トリプルスタンダードになってしまいます。単なる外交上の手段になってしまい、「害あって益なし」と言うのが今日時点の結論です。ましてや「人権決議」をするというなら、日本国内の人権問題にもっと敏感に対応して欲しいと思います。それもやらずに、新疆で何かある、香港で何かあると「人権決議」を持ち出すのは、政治的意図が見え見えと言えます。

(四本の柱)

中国との関係はこれまで申し上げましたように「4本の柱」がありますが、「安全保障」では、中々厳しいですが、最低限対話をして、日中の軍の責任者同士が直接対話をする等対話を強化すべきです。対話はほっておいて軍事的対応のみをやるのは完全に間違いです。外交に関しては中国と話し合うべき問題が山ほどあります。「東アジアの平和と安定」というとき、日本と中国が話し合わなければ何もできません。経済の発展の外的環境は「平和と安定」が必要で、そのためには外交的努力をするのは当たり前です。経済は、中国を含む東アジアの経済の発展を取り込みながら日本経済の活性化を図る以外の説得力ある戦略にお目にかかったことは無いです。日本国内の経済に目を向ければ、日銀の金融政策は3%成長を前提に作られています、中国やアジア抜きにどうやって実現しようというのでし

ようか。

「国民同士の関係」は前回も強調した通りで、大変重要なことです。対話を強化し、協力関係を深めることは必要不可欠ですが、それを阻んでいるのが「国民世論」です。しかし、それは作られた世論なのです。内閣府の調査によって9割の日本国民が「中国は嫌い」と答えているとことですが、別の処では同じくらいの比率で「中国との関係は大事」と答えています。これが日本国民の率直な感想であり、鋭い指摘であると思います。

(信頼関係)

この二つの矛盾は、現実の外交の中で日本の利益が最大になる方向で展開すべきだろうと思います。今の岸田政権は中国との対話強化の方向に舵を切っていますし、いずれ国民の支持を得ることが出来ると思います。また、安倍政権時代、安倍訪中～李克強訪日の過程で、一回で80に近い合意を行っているのに、ほとんどが実行されないままです。両国政府で協力合意済の案件はどんどん進めるべきであり、双方が利益になることを協力し合って成果につなげるべきです。そうすることで、政府関係者の現場の信頼感が生まれ、成果が出れば政府同士、国民同士の信頼関係増進につながっていくのです。今やるべきことは、この対話を強化し、協力関係を続けていくことと思います。

(求められる外交的繊細さ)

そのためには、社会の雰囲気作りが大事で、相手を不必要に自尊心、感情を傷つける外交を行うべきではないと考えます。仮に、国民という観衆を前に、舞台上パフォーマンスを行うような外交をやっていたら、相手を傷つけることになります。相手を傷つけず自分の意志は伝えるという外交の鉄則が必要です。幸いにも今の岸田政権はそこを注意してやっているのですが、ただ、今外野になった部分がうるさいので、その部分が中国との関係を傷つけているという事も言えます。

(東アジアと世界の将来を見据えた日中の共通目標)

最後に、日中は文化を共有しています。明治以来150年、我々はアジアという意識を持ち、西洋に追いつけという気持ちで頑張ってきましたが、今日の欧米社会の現実を見れば、欧米が必ずしも目標という事ではなく、如何にしてアジアの国々がお互いに切磋琢磨して、アジアと西洋を持っていくか、地球全体としてどうやって平等社会を作り上げるかという方向を求めるべきだと思います。そのために日本は“東アジア”或いは“東洋”を意識すべきものとしばらく前から感じています。中国にもそれを理解してもらいたいし、徐々にそうした人が増えていることも事実です。

「東アジアと世界の将来を見据えた日中の共通目標」を普遍的価値と置き換えてもいいと思います。しかし、皆さんご存知の「普遍的価値」は100%ではないと思います。「自由と平等」は、自由を求めすぎれば格差が起これ「平等」を求めすぎれば自由がなくなる、という相対立する概念になっています。ここにどうして「寛容」という言葉が入ってこないのでしょうか。この「寛容」という原則を入れることで新たな日中の共通目標が出てくるのではないかと思います。そして日中関係は「寛容」という原則が入った時どんな国家

関係になるかを世界に指し示せばいいと思うし、そのことを日中の有識者が真剣に考える時期に来ていると思えてなりません。従来の西洋の枠組みだけでなく、その上に東洋の枠組みも載せていく。西洋と東洋の対立ではなく、西洋の持っていたものをさらに高め、アジアの持っていたものをさらに高めるというという、ウイン・ウインの関係が出来るものと確信しています。そういうことも日中の中で話し合わなければならないのではと思います。

(ソフトパワー)

現在、日本の最大の問題は、アメリカもそうですが経済が思ったほど伸びず、外交力を含めたソフトパワーもさらに強化しなければならないという事だと思います。究極の処、これが日本の中国との交渉の力となるのです。これまでの軍事面に重点を置いた議論もある程度は仕方ない部分もありますが、我々が中国と渡り合える本当の支えは経済力であり、外交力を含めたソフトパワーを強化が重要です。これによって、国力は相対的に小さくなったが外交力は強いという状況を作り出せば中国が一方的という関係にはならないと思います。

なぜなら、あれだけ力関係では圧倒的にアメリカ側に有利でありながら、米英関係は常に平等に近いものであった訳です。その最大の理由は英国のソフトパワーにあり、経済的な国力表示が示すものとは異なった政治・外交上の米英関係が出来上がったという事があります。日本はそれを目指すべきで、ソフトパワーを強めることで10年～20年或いは50年の誇り有る中国との関係を維持していくためにも、それに向けた国力増強、経済力、ソフトパワーを必死になってやるべきものと考えます。

以上で私のプレゼンテーションを終わります。

ご清聴ありがとうございました。

【ご参考】講演レジュメ

「米中関係と日本～北京冬季オリンピック・パラリンピックを控えた中国の内外情勢を踏まえ、日本はどう生き抜くか～」

2022年1月24日

1. 議論の与件

- (1) 核兵器等大量破壊兵器の管理、気候変動、感染症等の地球的課題は、さらに重大化。科学技術の国際管理も急務。人類は地球を破壊し人類を消滅させる強大な力を保有。国際社会の主旋律は当然、「協力」。
- (2) 経済のグローバル化は、一定の修正は受けるが、基本は継続。
- (3) 確実に「多極化世界」を指向。「リーダーシップ」の確立は可能か？
- (4) 中国は、当分の間、台頭を続け影響力は増大。だが総合力において米国を越

えず、中国主導の国際秩序が出来上がることもない。

2. 米中関係

- (1) 中国は内政の年。秋の党大会が中心。プラスになることはやり、マイナスはやらない。

習近平政権の表面的安定度は高まっているが、脆い面も持つ。このまま党大会に流れ込む。

強権による押しつけではなく、人心の掌握をいかにして確保するか？

対米姿勢も受動的（攻めても点数は稼げない）。しかし譲歩はしない。

- (2) 米国も内政の年。対中強硬姿勢の転換は不可能だが、バイデン政権は昨年9月の首脳電話会談以降、対話を重視。ワシントンでも徐々に変化あり。
- (3) 米中関係の本質は、クラスの1番と2番の争い。半永久的に角突き合わせると見るのは間違い。中国の台頭を抑え込むのは不可能。中国が世界を牛耳るのも不可能。いずれ米国の主導的地位は保たれながら、中国の国力相応の国際的地位が認められる、新たな米中関係が定着。
- (4) そこに至るまでの間、プロセス管理、危機管理が急務。日本は中国との一定の信頼関係を維持し、米中の衝突回避に動くべし（例：台湾海峡）。

3. 日本のあるべき対中政策

- (1) 日中関係の基本は、「競争と協力」（「対峙と協調」、「同盟と協商」）。
- (2) 4本柱（①政治・外交、②安全保障、③経済、④国民同士の関係）のバランス。
- (3) 一定の信頼関係は不可欠。軍事的抑止力だけでは危険は増す。そのための対話の強化と信頼感の深化。だが現状は硬直的。
- (4) 今こそ、外交的繊細さ、敏感さ、手練手管の出番。だが日中、特に中国の政治が、それを許さず。外相会談と、それに続く首脳会談は不可欠。
- (5) 大きく東アジアと世界の将来を見据えた日中の共通目標の探求こそ急務。有識者の出番！